「キネマ旬報」ベスト・テン表彰式に招待

上原 昇（２組）

「キネマ旬報」（以下「キネ旬」）は 1919 年（大正 8）創刊の 100 年以上の歴史ある映画雑誌で、昨年、月 2 回発行から月刊誌になりました。例年、2 月上旬発売の 2 月下旬号は前年公開された映画（邦画と洋画）のベスト・テン特集となっています。
同誌によるベスト・テンは世界最古クラスの映画賞として知られ、同誌最初のベスト・テンは 1924 年（大正 13）の洋画ベスト・テンを嚆矢としています。その時のベスト１を調べてみると、芸術的に最も優れた映画として『巴里の女性』（C.チャップリン監督）、娯楽的に最も優れた映画として『幌馬車』（J.クルーズ監督）が選ばれています。
映画を趣味としている筆者は、「キネ旬」を本屋で立ち読みするのが常ですが、ベスト・テン特集号だけは毎年買い求めており、書棚には 1964（昭和 39）年から 2023（令和 5）年まで 60 冊近い特集号が保管されています。（写真）
因みに、1965 年発売号は 64 年度のベスト・テン特集で、邦画ベスト１が『砂の女』、洋画が『かくも長き不在』です。そして雑誌の値段は 65 年が 350 円、24 年が 1,540 円でした。
今年のベスト・テン表彰式には読者の招待があると知り、応募したところ先日招待券が届き、2 月 18 日（日）の夜、渋谷の「オーチャードホール」に行ってきました。

今回で 97 回目のキネ旬ベスト・テンの主な受賞は以下の通りです。
なお、受賞対象の数は 15 あり、一人一人に特製トロフィーが渡されました。
◆日本映画ベスト１：『せかいのおきく』（阪本順治監督）
◆外国映画ベスト１：『ＴＡＲ／ター』（トッド・フィールド監督）
◆日本映画監督賞　：ヴィム・ヴェンダース（『PERFECT DAYS』）
◆外国映画監督賞　：Ｔ．フィールド（『ＴＡＲ／ター』）
◆主演女優賞　　：趣里（『ほかげ』の演技）
◆主演男優賞　　：役所広司（『PERFECT DAYS』ほかの演技）

残念ながら、私はベスト１作品の邦画・洋画ともに、まだ観ていません。
主演女優賞初受賞の趣里は、現在、ＮＨＫ朝ドラ『ブギウギ』で福来スズ子役を熱演しています。主演男優賞の今や世界的大スターの役所はこれまで最多の４回目の主演賞で、師匠の仲代達矢を超えたといっても良いでしょう。

当日、受賞者の目玉である主演の二人は、趣里が体調不良、役所がロンドンで映画キャンペーン中のため欠席というのは残念でした。
ほかの受賞者の中で、新人男優賞の塚尾桜雅くんは現在小学２年生で、史上最年少とのことですが、その大人顔負けの気の利いたスピーチには驚きました。
ベスト・テンで投票される作品は昔に比べ飛躍的に増えていて、今回の最下位は邦画で 131 位、洋画で 162 位となります。64 年特集号の最下位は邦画 40 位、洋画 39 位と大分少ないです。ある映画評論家の調べでは、2000 年までは邦画、洋画合わせて年間公開されるのは約 600 本だったのが、2005 年以降は邦画だけで 600 本を超えているそうです。どんなにお金と時間があっても、その年公開の全ての映画を観ることは不可能な時代です。
また、上田高校同窓生の鶴岡慧子監督（105 期）の作品『バカ塗りの娘』が邦画部門 40 位に入っているのはグッドニュースで、彼女の今後の活躍を期待しています。
そして、日本映画監督賞をドイツのヴェンダースが受賞しているのは、映画界もグローバルな世界になっていることを象徴しています。

2023 年キネ旬ベストテン特集号
表紙は役所広司と趣里

1964 年キネ旬ベストテン特集号
表紙はサンドラ・ディー（1942-2005）

（2024 年 2 月 19 日記）

以上